

無間地獄と見て見ぬふり

“一難去ってまた一難”、先が見えないのか、隠されているのか、それとも見て見ぬふりなのか、とにかくきりが無い。ただただエネルギーを削がれるばかりで、つい何者かに仕組まれたこれまでとこれからのようにも思ってしまう。人は平穏なときには何もしない、何もしないから平穏なのかもしれない。しかし、常に“最悪に備えたうてで楽天的に生きる”、べきところを、どうしても何もしないに等しい暮らしをしてしまうものだ。過去に学ぶことはしても、それを未来に活かすことをしないのでは、闇は更に深いものになってしまう。当事者が能天気で、事態が悪化して初めて右往左往し、しかもそれを繰り返す。頼るべき存在は、深刻さを煽るばかりで、まるで明るい未来が“困る”、のではないかと思わせる。世が騒然としてこそ安泰で居られる者たちが表に裏に蠢いて、ほくそ笑んでいるのではないか…そして残るのは疲弊した“普通の人々”である。『次の手を考える！』は懐かしい映画（『アンタッチャブル』の台詞だが、施策と個人責任、バランスの取れた“次の手”を自ら考え、かつ待っている。

あとがき …今月の花『水仙』

うぬぼれ」「自己愛」「エゴイズム」など、水仙の花言葉にはあまり良い言葉は使われていないようだが、それでも「気高さ」というのもあるそうで、辛うじて自身のプライドを保っているといったところだろうか。実家の裏手辺りで、ひそかに、それでいて凛とした風情をみせてくれるその存在感に、こちらの身も引き締まる。そして、どうしても、この地味で儉しい佇まいに魅かれてしまう。

貴船神社（といっても、京都にあるあの有名な神社ではない）の鳥居の参道に続く階段を挟んだ脇に、皇紀二千六百年の記念碑が建っていて、季節を分けて、その一隅に水仙と一初の花が咲いた。鳥居からの坂道を下りきった所には、亡くなった父が国鉄の時代十六年間勤めた、今では侘しくも哀しい無人駅がある。どこまでも、あくまでも地味である。<K>

ヤー 楽しいことだけかたちにしよう

YAH!

You Ain't Heard Nothin' Yet!

2022 **01**
January



1月の花 水仙

INDEX

- ◆1月の花…水仙
- ◆点と線…と面 ご近所歳時記
- ◆こんな映画を観てきた
- ◆こんな唄を聴いてきた、出くわした

TAKE FREE

¥0

特集! 昭和の沁みる唄

作詞者も作曲者もわからない、ただ唄うのは藤圭子。LP『蝶よ花よと』の中におさめられたオリジナルだというが、全く記憶に残っていない。というわけで、昭和の唄ではあるが、聴いてきてはいない、令和になって出くわして、今やけに“沁みてる”のだ。

『ほろほろと』

令和になって、こんな唄にでくわした!

古びた唄を口ずさんでる
女の背中からはからかっちゃ駄目よ
ほろほろとほだされて
くどかれて捨てられる
ないものねだりの幸せばかり
追ってきました
人生の吹き溜まり

さて、“ここにきて”の藤圭子ベストファイブ…『京都から博多まで』（風が冷たい 小雨が重い…これはさすがに知っていた）、『さすらい』（ことば忘れたくちびるは 草笛ひとつ吹けるだけ）、『恋の雪割草』（あの人がいなくなる この町捨てて）、『哀愁酒場』（あなたにやさしく お酒をつがれ）、『新宿挽歌』（街の名前かわらうと 街の姿かわらうと）と、このあたりか？『命預けます』もいい、ただ『京都から…』もそうかもしれないが、これはヒットし過ぎて“今になって、沁みる…”にはあたらない??とここで、カバー曲にも“沁みる”のものが多い。『淋しいから』（中尾ミエ）、『さすらい』（克美しげる）、『波止場町』（森進一）、『池袋の夜』（青江三奈）、『誰もいない』（菅原洋一、『湖愁』（松島アキラ）、『浅草しぐれ』等など、いずれもオリジナルとはまた違った趣で、更によく“沁みる”のである。

たのしいことだけ かたちにしよう

ご近所歳時記2021

3年かけて“調布七福神めぐり”

思えば、“コロナ前”のことで、仕上がったのが、写真（右）の通り、令和元年（2019年）だった。最後の深大寺というのは初めて訪れたという訳ではなく、何度目か、七福神めぐり用に？改めて、正式に？訪れたものであった。

さしたる目的もなく始めたもので、完了したとて特別な感慨もないし、門前を通り過ぎただけものだが、何かこうしためやすというか“とっかかり”があると取り掛かるきっかけにはなる。なににつけ理由付けは必要だ!



こんな映画を観てきた

ブルースブラザーズ



『The Blues Brothers』（1981/米
監督：ジョン・ランディス）

看守に付き添われて一人の男が刑務所内の通路を無言で歩く、刑期を了えてめでたく出所である。このカットに十分時間をかける。観る側としては、始めからこの映画がドタバタコメディであることが解っているのになかなか笑えなくてイライラするわけだ。ミュージカル・コメディ・アクション大作というが、派手なカーチェイスだの、加えて軍隊までが登場する大捕物劇は無用の物だった。執念深くジェイク（ジョン・ベルーシ）をつけ狙う謎の女（キャリア・フィッシャー）に至っては登場の根拠が理解できない。ただし、懐かしのツィギーが何となく意味もなく登場するところなどは面白い。

いかれた教会（ジェームズ・ブラウン）、下町の食堂（アレサ・フランクリン）、レイの楽器店（レイ・チャールズ）、カントリー&ウエスタン酒場、そしてパレスホテルでのコンサート。特に、酒場でC&Wでないとなんか納得しない客の前で、苦し紛れに演奏した誰もが知っている“ローハイド”は迫力満点だった。プライドやこだわりは何の意味もない、ここではやっぱり“ローハイド”、そうでなければ客は断じて許さないのだ。